

熱田 神 宮 宝物館だより

熱田神宮宝物館

編 集 内 田 雅 之

〒456-8585

名古屋市熱田区神宮一丁目 1 番 1 号

TEL (052) 671-0852 FAX (052) 671-1202

(年 6 回発行)

8 月コーナー展 「ご装束・神宝の美と技」より



おんあらばこ
御荒筥

葛製

縦 34.0cm

横 34.0cm

高 5.5cm

1 合

現代 (平成 27 年撤下)

被蓋造りの筥で、蓋・身ともに、ツヅラフジ科の蔓の芯を堅芯として、蔓の外皮を細かく剥いで横紐とし、
堅芯と横紐が交互に織り込まれる平織状に編み上げて形成されている。神宮の御神宝中に本御料に近似する
ものとして「白葛筥」が調進されているが、これは材料を白水（米のとぎ汁）で晒して乾燥したものをを用い
るのに対し、本御料は材料の採取後、自然乾燥させたものを使用している。

葛編みの筥は正倉院御物にも多く遺されており、その発生の古さを窺い知ることが出来る。神宮の長暦・
嘉元・寛正の各『送官符』に記載されるが、その用途については不詳である。何かの容器として調進された
ものであろう。本御料は皇大神宮別宮、瀧原竝宮の御神宝として調製、伊勢の神宮より下附された筥である。

7月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

6月30日(金)～7月25日(火)
(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

— 展示品より —



重文 木造舞楽面 崑崙八仙 木製漆塗 1面
面長 20.8cm 面幅 15.0cm 平安時代

桧材に下地漆をして緑青彩色を施していたが、現在では剥落が甚だしい。

鳥の面貌に作られており、額には幾条もの皺を刻み、両口元には肉垂れを大きな花卉型に表している。本来は尖った口嘴が付随するが、残念ながら材の剝合わせ面から脱落し、顎部も欠失している。

表面は高麗楽に属する楽曲に用いるもので、崑崙山に遊ぶ瑞鳥(冠鶴)が戯れる様を表現した舞とされる。別名「鶴舞(つるのまい)」とも言われ、四人の舞人で舞われる為、同面が4面遺されている。



県文 神事面 老爺 木製彩色 1面
面長 27.0cm 面幅 15.7cm 南北朝時代

額・頬・目尻などに浅い皺を刻み、額に冠形をあらわした老人の面貌の仮面である。

材質は桂で、表面に胡粉を塗り、朱色がかかった肌の彩色を施し、額際・眉・口髭・顎鬚を墨で描き、両眼は吊目に割り抜いている。特に左眼は一度穿った穴を埋め、新たに下方に作り直した痕跡がみられる。瞼・額の皺・口唇には朱漆を施し、口元の表情は、空吹や鯉口の原型を思わせる形状である。裏面は全体に黒漆を施しているが、彩色は殆ど剥落し、割れを補修した跡が見受けられる。

その他の主な展示品

◎重文 ○県文

《書跡・古文書》◎日本書紀(巻第五) 徳川家定知行朱印状 教訓抄

《絵画》七夕図-森高雅筆- 日本武尊草薙之図-忠香筆- 船上山之図-松本楓湖筆- 他

《工芸》◎黒漆根古志形鏡台 ◎朱漆弓 ◎入帷残闕 ○神事面若人(乙) ○尺八 神楽笛 他

《刀剣》◎太刀銘真行 ○短刀銘長谷部国信 脇指銘長門守藤原氏雲 短刀銘長広作 弥十郎定吉 他

《コーナー展示》発会20周年記念 熱田神宮技術奉納奉賛会奉納刀剣展

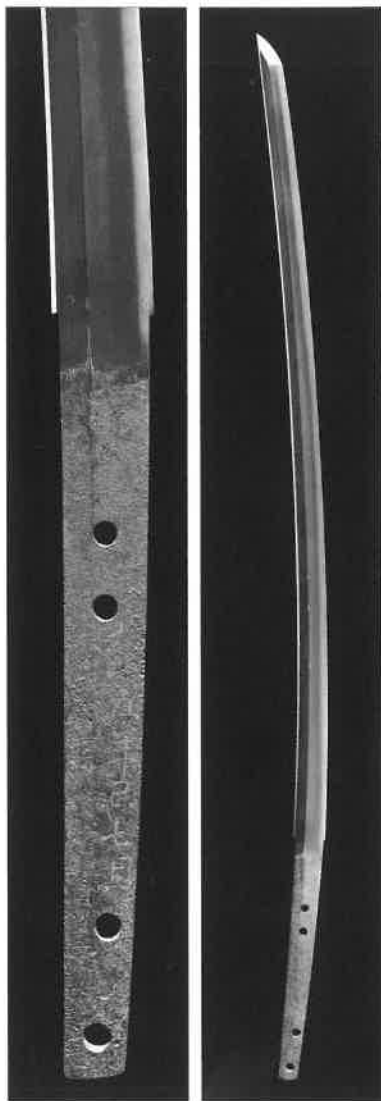
平成10年より鍛錬・奉納された刀剣や奉納刀匠の新作、鞘師や白金師などの作品を展示。

8月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

7月28日(金)～8月29日(火)
(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

— 展示品より —



重文 太刀 銘 備州長船兼光 1口 鎌倉時代
長 70.0cm 反り 1.3cm

鑄造、庵棟、反り浅く磨上げる。板目肌よく詰み、さかんに乱れ映り立つ地鉄に、片落風の互の目乱れを焼き、匂口明るく冴える。帽子は表裏共のたれ込み、先小丸に浅く返る。

茎の現状は、先浅い刃上り栗尻となり、佩表茎先に長銘と、「天明五年巳七月奉納」の朱銘が、また裏には「本三州之士尾州矢田作十郎助吉帯之」と朱銘がある。

兼光は、長船景光の子と伝え、その作刀期間は鎌倉時代末期の元亨から南北朝時代中期の応安にかけて50年以上の長きに亘る。暦応以前の作は、景光風の片落ち互の目や直刀調に互の目交じる出来が主で、姿も尋常である。しかし、観応以降は身幅広く長寸になり、刃文ものたれ主調で、地刃に沸のつくものが目立ってくることから、古くより二代説が唱えられている。ただ、一人でも無理はなく、作風の違いについては時代の変革期に活躍し、その要望に応じたためともいえよう。この太刀の地刃には師である父景光の作風が強く表れている。

奉納者は家康配下、矢田作十郎助吉の同名末孫で、尾張藩小普請組を勤めた人物と思われる。晩年は鑑識(剣相)家として知られたという。

その他の主な展示品

◎重文 ○景文

《書跡・古文書》 ◎日本書紀(巻第六) ◎法華経涌出品 ○紺紙金字般若心経 徳川家茂知行朱印状 他
《絵画》 伝日本武尊坐像 日本武尊東征図-小山榮達筆- 宮簀媛図-勝田哲筆- 熱田三面大黒摺絵 他
《工芸》 能面白色翁・黒色翁・千尉 蓬萊鏡 鳥居文様小瓶子 日本武尊熊襲討伐絵手付水指 他
《刀剣》 ◎太刀銘長光 太刀銘雲次 太刀銘守利 脇指銘 備前長船康光 短刀銘正家 他
《コーナー展示 -ご装束・神宝の美と技-》 ◎彩絵絵扇 ◎襪 ◎錦包挿鞋 ◎黒漆根古志形鏡台
◎黒漆菊亀甲蒔絵冠箱 ◎朱漆弓 ◎黒漆平胡籥 金銅造御太刀 紫羅御裳 御櫛筥 陶猿頭形御硯 他

—展示品より—

熱田神宮にまつわる神々と偉人たち（その5） ～熱田の杜をブラブラと～

「熱田神宮 創祀千九百年」 齋藤吾朗筆



ふじわらのもちなが 藤原師長という公卿です。「悪左府」と異名をとった左大臣藤原頼長の次男で、治承3年、平清盛によって尾張国に配流されてしまいます。師長は帰京を願い当神宮の神前で秘曲を奏でました。するとその妙なる音に御祭神は感銘し、神殿が大いに揺れたといいます。そしてご神慮があつてか、のちに都へ戻ることができました。師長は今の瑞穂区土市町辺りに配流されたといい、この辺りには彼の名が町名となった「師長町」や、琵琶や箏の名手であったことに因む「妙音通」という地名、彼の愛した琵琶の名器の名からついた「白菊町」などその名残りが今に伝えられています。

そして、左下に半円状の石橋が描かれ、その上に旅の僧が佇んでいます。この橋は今も境内に残る「二十五丁橋」です。板石が25枚敷かれていることからこの名があります。そして何やら口ずさんでいる旅の僧は西行法師です。熱田神宮と西行の関わりは、西行の難クセに端を発します。西行が二十五丁橋の近くの木陰で休んでいるところに当神宮の神職が差しかかります。すると西行は神職に向かってこう問いかけたといいます。「かくばかり 木陰すずしき宮立ちを 誰が熱たと名づけ初めけむ」。すると当神宮の神職も負けてはいません。「やよ法師、東の方へ行きながら、など西行と名告り初めけむ」。まるで子どもの言い合いのようですが、この遣り取りが都々逸となり、当地方が都々逸発祥の地とされる由縁です。

1900年の悠久の歴史を持つ熱田神宮、これらの話しは今からおよそ1000年前の伝説ですが、御祭神にとっては、つい昨日の話しのように思っていらっしゃるかも知れません。（以下次号）

今回は当神宮にまつわる楊貴妃伝説についてお話をさせて頂きました。今号は平安時代に活躍した有名人と当神宮のかかわりをご紹介します。

下段の写真向かって右側に、鳥甲と称する被りものに赤い装束を着けて舞う人物が描かれています。この人物は尾張浜主という当神宮の伶人（雅楽などを奏する人）です。写真が小さく申し訳ありませんが、よく見てみると、顎に白い髭をたくわえているように見受けられます。実はこの人物、仁明天皇（在位833～850）の御前で「和風長寿楽」を舞いました。

その折の年齢は何と113歳!! 『続日本後紀』によれば、承和12年正月の最勝会に参列していた群臣は、起居もままならない浜主を按じます。しかし楽曲が流れるやいなや、少年のように軽やかに舞い、天皇に「ななつぎのみよにまわへるももちまりとをのおきなをまいたてまつる」という和歌を献じています。更にその2日後にも再び舞を演じ、「おきなとてわびやはをらぬくさもきもさかゆるときにいでてまひてむ」と天皇を称賛する和歌を捧げています。以前、百歳を超える双子のお婆ちゃんが話題になったことがありましたが、当地方は古来長寿の人が活躍する土地柄なのかも知れません。

次に写真中央で琵琶を弾いているのが、

（1179）